令和３年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

# 事業実施報告書

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

## 道府県・政令市名【　愛媛県　】

## 学校名【　愛媛県立今治北高等学校　】

| | |
|---|---|
| １実践テーマ | Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（複数選択可） |
| ２実施対象者<br>（学年・人数） | ・第3学年　２５名 |
| ３展開の形式 | （１）学校における活動<br>①　教科名（　　）<br>②　行事名（　　）<br>③　その他（　特別活動　）<br>（２）地域における活動<br>①　イベント名（　　）<br>②　その他　（　　） |
| ４　目　標<br>（ねらい） | ・今治市の姉妹都市でもあるパナマ共和国について学び、異文化理解や発展途上国の現状を知ることで、生徒がより広い視野を持つことを期待する。<br>・国際的視野を広げ、国際交流や支援の意義を考え、地域において自分の役割を見出すことができるようにする。 |
| ５　取組内容 | ・JICA 四国、FC 今治の協力を得て、全４回の講座を行った。<br>Day1（7月28日）<br>「ホストタウンについて」<br>・JICA 愛媛県国際協力推進員の大石さん進行のもと、今治市がホストタウンとなっているパナマ共和国について、現地で JICA 青年海外協力隊として活動されていた松下さんから学んだ。<br> |

Day２（7月29日）

「FC 今治・オスカル・リントン選手（パナマ共和国出身）を迎えて」

・パナマ共和国出身、FC 今治・オスカル選手からパナマ共和国や日本の文化との違いについて学んだ。また、質疑応答を通して交流することができた。

Day３（8月4日）

「FC 今治の選手との交流を通して、地域創生と多文化共生を考える」

・FC 今治・松井選手・武井選手とともに、地域創生やSDGs について学

んだ。その後、グループに分かれ、私たちにできる取組について考えた。

Day４（８月２４日）※オンラインでの実施

「自分たちで考案した交流イベントを発表」

・Day３で考案した取組についてグループごとに発表した。

| | |
|---|---|
| | |
| ６　主な成果 | ・事後アンケートでは、講座参加満足度 4.9 と高評価であり、４日間の講座を通して異文化理解や国際交流について学べた。<br>・「参加してよかった」、「もっと詳しく学びたかった」という感想が多く、今回の講座の目標は概ね達成できたと感じている。<br>・外国人との交流は難しいと感じていた生徒がほとんどであったが、実際に交流することで、自分の努力と勇気次第で特別ではないと気付いた生徒が多かった。<br>・オリンピック・パラリンピックを通して、今治市を見つめ直すことができ、街の魅力を再発見できたと同時に課題も見えてきた。<br>・FC 今治や JICA 四国と活動できたことを貴重な経験であったと感じている生徒が多く、なかには進路について考えるきっかけになった生徒もいた。 |
| ７実践において工夫した点（事業の特色） | ・Day2、Day3 では、今治市をホームとする FC 今治と連携し、本事業を実施することができた。選手とともに考案したイベント企画は、今後実現できるよう話し合いを重ねていきたい。<br>・コロナ禍ということもあり、校外活動等ができていない学年であったので、JICA 四国や FC 今治の選手・スタッフなど多くの方々と関わりを持てたことは生徒たちにとっても貴重な機会であった。 |
| ８主な課題等 | ・今回の取組を通して、学校単位だけでの継続は困難であると感じた。県や市町村、地元企業などと協力できる体制が必要である。<br>・このような取組が今後も継続するためには、学校全体で取り組むことが大切である。今回は一部の教員・スタッフで計画・準備を進めたが、今後は計画段階から学年や校務分掌担当と連携をとっておく必要がある。<br>・事業の内容にもよるが、できるだけ多くの生徒が参加できるようにしたい。 |
| ９来年度以降の実施予定 | ・JICA 四国や FC 今治とは、今後も継続して様々な内容の講座を企画していきたい。 |